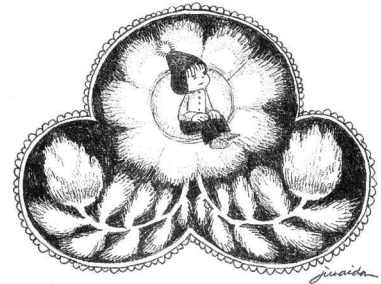


朝日歌壇俳壇



〈日曜日のプロローグ 09〉 junaida

うたをよむ 写実の幻想性

川野 芽生

灯さすにある室内に雷させば雷が彫りたる一瞬の暁
小原奈美の第一歌集『声影記』(港の)人が刊行された。待望の、という言葉がこれほど相応しい歌集も他にあるまい。端正な文語で構成される、理知的な文体。鋭い観察眼に裏打ちされた写実。それが暴き出すのは、写実は極めれば幻想へ接近していくという事実である。顕微鏡が発明された時に人々を襲った驚きはこのようなものであったろうか。

暗い部屋に稲光が差し込むと、置かれていた硝子壺が光の中に浮かび上がって、再び闇に沈む。掲出歌が描くのはそれだけの光景だが、はっとするほど鮮やかだ。文体の緩急も見事で、ゆったりとした上の句に対し、下の句は紫電一閃、歌の後に再び訪れる闇の中で反芻して、目にしたものを初めて理解する。闇に挟まれた一瞬の光と、その光のもと、エックチングのような細い線で空間に刻み込まれた透明の壺が、闇を変質させる。

時をやや先に行かせて道の辺に鳥の散らせる花を浴びあつ
置時計売場の正午つと過ぎて正午を飾る葉あふれた
文体とあいまって、時間の感覚が美しい。一首目、時に急ぎ立てられるように歩いていても、花の下に立ち止まる折には時という同伴者からわずかに離れ、エアポケットのような時間を楽しむ。二首目、十二時を知らずとどりの時計の音を、「正午を飾る葉」と捉えようと、まるで天体の音楽のように思われる。短い歌の中に、時間が幾重にも流れているかのようだ。

◆「永田和宏選」は選者が海外出張のため休みます。

第68回短歌研究新人賞 短歌研究社主催。
霧島あきらさんの「正しい椅子」(30首)に決まった。

◇朝日歌壇 入選取り消し 6月1日付の歌壇に掲載した「徘徊の母は窓から抜け出して探しぬ十五で逝った弟」は二重投稿でしたので、入選を取り消します。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合もあります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから

◆高山れおな選

夏霧や物語とも歴史とも (東かがわ市) 桑島 正樹
コーヒゼリーかつて焦土の交叉点 (栃木県壬生町) あらゐひとし
苗代を眺める喪服続々と (名取市) 相澤ひさを
ぞうさんのじょうろ置き去り梅雨晴間 (東松山市) 鈴木 圭
ふるさは溜池多き麦の秋 (加古川市) 森木 史子
しじみちよう薄紫に母おも (桑名市) 水谷てる代
息詰めて投句は秘めごと五月闇 (相模原市) のなかあけみ
昭和を語る顔のかがやく昭和の日 (太田市) 渋谷 今美
南吹く到着ロビーよりアオサイ (我孫子市) 藤崎 幸恵
遠蛙にはかに水の匂ひかな (神戸市) 倉本 勉

【評】桑島さん。事実の彼方、霧を隔てるようにして物語と歴史と。直接には屋島の古戦場を詠む。あらゐさん。「銀座四丁目」と前書き。空襲被害については、源平合戦とは比較にならない質量の情報が残るが……。相澤さん。故人の苗代か。

◆小林 貢子選

パンダナを巻いて加勢の袋掛 (諫早市) 後藤 耕平
濃緑に金をかぶすや椎若葉 (東京都大島町) 大村 森美
傘雨忌の語感しみじみ外を見る (広島県熊野町) 中村 竜哉
薫風や心がちよつと空回り (北海道当別町) 古川 周三
素足好き素顔素つどんども好き (松阪市) 籠谷ひろこ
薫風や無駄な言葉を取り除く (村上市) 鈴木 正芳
風鈴や鴨居の中になにか在る (箕面市) 櫻井 宗和
人間の芯は骸骨寺山忌 (北本市) 萩原 行博
天金の書が届きけり夏安居 (東京都世田谷区) 松木 長勝
駄目元でやつぱりだめでござるん (栃木県壬生町) あらゐひとし

【評】一句目、鉢巻とも日本手ぬぐいとも味わいの違うパンダナ。お洒落で、やる気も出る。二句目、椎の葉と花の独得な色あい、その美しさを丹念に描写。三句目、久保田万太郎の忌は五月六日、憶ふ思い。四句目、心は色々な表情を見せる。

◆長谷川 權選

夏場所や葉の一敗大の里 (立川市) 須崎 武尚
あの夏の記憶のひとつ月の石 (長野市) 縣 展子
更衣合はせる妻のなかりけり (町田市) 藤巻 幸雄
よつと上ぐまばゆき腕更衣 (石川県能登町) 山野 楓子
この星に子供の兵士子供の日 (福井県伊達市) 佐藤 茂
今日もまた怒りつつゆく植田道 (豊川市) 河合 正秀
原発の神話の中の春惜しむ (福島県伊達市) 佐藤 茂
チューリップ大きく開きあぐくする (津市) 深沢 泰二
満州の悲惨な歴史夏が来る (三郷市) 木村 義熙
マネキンの五体散乱更衣 (長崎市) 下道 信雄

【評】一席。千秋楽の豊昇龍戦。あの一敗をバネにもっと大きくなる。二席。昔の万博でみた月の石が今も心に。一時代の象徴として。三席。その人がいない。何という更衣のさみしさだろうか。十句目。これも一つの涼味。やや物騒ながら。

◆大串 章選

赤色は今年限りかカーネーション (東京都葛飾区) 小林 容子
吾と同じ生家をもてり燕の子 (前橋市) 荻原 葉月
父の家父の藤椅子父の香よ (武蔵野市) 相坂 康
山法師兵役もなく八十路来て (東京都新宿区) 各務 雅憲
半世紀前の落書き微の蔵 (高山市) 直井 照男
ひまわりがこの世あの世に花ひらく (新座市) 丸山 巖子
鯉のぼり泳がぬ村となりにけり (松阪市) 石井 治
母の日の母を泣かせて仕舞けり (香川県琴平町) 三宅久美子
新緑の大樹鳥語の飛び交ひて (箕面市) 藤堂 俊英
点滴の時を刻みて明易し (筑西市) 大久保朝一

【評】第1句。「今年限りか」が切ない。生きている母へは赤いカーネーション、亡くなった母へは白いカーネーションを贈る。第2句。「吾と同じ生家」が燕の子への親近感を示す。第3句。父が長年坐っていた「藤椅子」、父への思いは尽きない。